

## 喉頭蓋膿瘍症例の検討

丸山 裕美子<sup>1)</sup> 星田 茂<sup>1)</sup> 塚谷 才明<sup>2)</sup> 古川 亅<sup>2)</sup>

1) 黒部市民病院耳鼻咽喉科

2) 金沢大学耳鼻咽喉科

急性上気道感染症に伴う気道狭窄は日常診療において緊急対応を迫られる病態のひとつであり急性期の対処により予後がわかる可能性をもつ。2005年11月～2006年10月の期間に5例の喉頭蓋膿瘍を経験したため、その発生因子と臨床経過につき検討をおこなった。5例中1例に糖尿病と慢性腎不全を認めたが、他の4例に免疫機能低下を起こしうる基礎疾患は認められなかった。5例中2例は初診時喉頭蓋炎と判断し保存的加療を開始したが膿瘍への進行を認めた。5例中2例は膿瘍切開排膿後、気道狭窄の順調な改善を認めた(グループI)が、他の3例において術翌日の喉頭蓋の腫脹は術直後に比べ再度悪化していた(グループII)。グループIとIIの臨床的差異につき検討を行なったところ、後群は前群に比べて膿瘍形成確認日における白血球数とCRP値が高い傾向にあった。以後さらに症例を重ね検討したい。